

樹齢400年イチョウ 立木観音に

流山の彫刻家・畠山さん、8年かけ制作

「3・11犠牲者の供養に」

2011年3月の東日本大震災の犠牲者を供養しようと、流山市の円東寺境内にあるイチョウの巨木が根元を残したまま、高さ約5.5メートルの「立木十一面観音像」に生まれ変わった。枝や伸びた根を切り落とし生の幹を彫ったもので像の土台は根元のため動かさない。30日に足場が外され、全体像が姿を現した。

制作者は円東寺で仏像の彫刻教室を開いていた市内在住の元国語教師で仏像彫刻家の畠山誠之さん(77)。

像にしては「と提案したという。

円東寺の増田俊康住職(51)によると、境内にあった大イチョウは樹齢約400年、高さは約30メートルの巨木だった。

約3年後にはかなりの部分まで仕上がったが、区画整理による墓地の移転工事などで、作業が途中で約4年間ストップ。再開は今年3月

区画整理事業で道路建設が始まるため、10年以上前に県から枝と根を切るよう要請された。「こんな立派なイチョウを切るの忍びない」と悩んでいたところ、畠山さんが「立木観音

増田住職の承諾を得て、慈悲と救済の仏である「十一面観音像」を13年12月から彫り始めた。作業はすべて畠山さんが無償で引き受けた。枝や葉は切り取り、幹を高さ約5.5メートル部分だけ残して、チェーンソーで大まかな輪郭を作った。ノミで粗削りをし、部位ごとに細かく彫り込んだ。

区画整理事業で道路建設が始まるため、10年以上前に県から枝と根を切るよう要請された。「こんな立派なイチョウを切るの忍びない」と悩んでいたところ、畠山さんが「立木観音

約3年後にはかなりの部分まで仕上がったが、区画整理による墓地の移転工事などで、作業が途中で約4年間ストップ。再開は今年3月

区画整理事業で道路建設が始まるため、10年以上前に県から枝と根を切るよう要請された。「こんな立派なイチョウを切るの忍びない」と悩んでいたところ、畠山さんが「立木観音

約3年後にはかなりの部分まで仕上がったが、区画整理による墓地の移転工事などで、作業が途中で約4年間ストップ。再開は今年3月

畠山さんは「震災で犠牲になった人たちの供養になれば」、増田さんは「近くに小中学校や保育園があり、子どもたちを見守る像になってほしい」と話している。

(青柳正悟)



④イチョウの幹から彫り出した十一面観音像の前に立つ制作者の畠山誠之さん(左)と増田俊康住職(右)いずれも流山市元は高さ約30メートルの巨木のイチョウだった。枝などを切る際、2013年11月に法要を行った。円東寺提供